

きせきのぬくもり

なかむら
中村 真翔
まなと

春の日ざしが窓から、そっと、やさしく照らしていた、そんな昼下がりの日。

おそるおそる、だっこした、ぬくもり。

温かくて、やわらかくて、ずっと昔に、かいだことのある、なつかしいにおい。

少しでも力を入れたら、こわれてしまいそうな小さなきみ。

「はじめまして、お兄ちゃんだよ。」

生まれて、まだ半日の妹を、助産しさんが、いっしょに、だかせてくれた日のことを、今でも、はっきりと覚えている。

学校で、「命の学習」の時間があつた。

どのようにして、赤ちゃんが産道を通り生まれてくるかを布を使って見せてくれたり、いろいろと教えてくれた。

きせき。本当にそうだ。

きせきの連続と、お母さんと赤ちゃんの頑張りがあつて、今ここにいることの幸せ。

お母さんは、ぼくが生まれたとき

「苦しかったけれど、無事に生まれてくれてありがとうの、うれしさで、いっぱいだった」と、この言葉を聞いたとき、なぜだか、むねがいつぱいになり泣きそうになった。

なかなか、ふだんは、「ありがとう」なんて言えないから、母の日に言おう。と心に決めた、特別な日なら言えるだろう。

そして、いつか、ずつと先。ぼくが父親になる日がきたときは、その子をだいて、

「きせきの命を、ありがとう。」と、きつと言おう。

あの日、小さかった妹も、もう、すっかりとなまいきで、ときにはムカつくけれど、ぼくは、あのときの、ぬくもりを、ずつと忘れないだろう。

そして、妹が、もう少し大きくなったら、教えてあげよう。

「きせきの命」と、あの日のことを。

春の、おだやかな昼下がりの日に。